

TEAP試験についての考察と対策

2015年から新しく導入された入試方式で、受験者もかなり多く、今後もより重要性を増していくと思われまふ。すでに英語のテストをクリアした状態で行われるため、当日は国語と世界史で合否が決まるという「世界史巧者」にとっては“持って来い”の入試方式と思われていました。

しかし、蓋を開けてみたら、何とも解せない感じで、採点基準や配点が不明確であるため、受験生は合否のポイントが分からぬまま終わってしまったという結果だったのです。つまり、今回のTEAP試験の目的は、**国公立型の受験生つまり応用力を持つ生徒のかき集めであったのであって**、私立単願の受験生の全学部入試的なモノではないということが分かります。

そして、あれから、3年が経ちました。一言でいうと、ここの2年でやや問題が安定した感じがあります。3年連続の近現代への縛りはそのまま。量としては、初年度よりも2016年は減少、さらに2017年も少々減少。空所補充が10問出題され、短文論述が4問と350字論述でした。雰囲気的には、2016年・2017年は同じ。やはり、**国公立受験者を意識しての問題**です。このTEAP型入試に対応しようとして、**上智一般の入試対策を疎かにすると本末転倒になる可能性が出てくる**ので注意が必要です。

1つ言えること 「東京外語志望の人が受けやすくなった」
では、講評です。 *詳細は講義内の10分解説

2015年入試

設問1～3について

年代・人物の一問一答と基礎 Level の文章正誤問題

設問4について

絵画に関する説明（「球戯場の誓い」）

絵画の名前とその出来事の歴史的意義を10字と40字で説明

設問5について

「フランス人権宣言」と「世界を一回りした」を大西洋革命の視点と、ナポレオン法典へ発展した近代的民法典の広がりをも120字で説明

（国公立2次試験の100～150字論述と同様、Level的には大阪大や名古屋大Level）

設問6について

社会契約説でよく説明される、「イギリスは議会主権」「フランスは人民主権」という相違点を史料内の用語を使用して文章化していく400字論述

（ベースは世界史知力ではあるが、丸暗記の他の上智入試問題とは一線を画す）

2016年入試

設問1について

戦後のアジア・アフリカの指導者・南北アメリカ史の空所補充を10問

（戦後史もあるが用語は基礎レベル、しかも四択なので楽勝）

設問2について

4カ所の空所に短文を入れる問題。前後の文章を読解しないと知識があっても的外れの答えになるので国語力が必要だ。先住民の位置付け・南部のプランテーション農業・シェアクロッパー・キング牧師の運動の意義を14～20字で書く。

設問3について

北アメリカと南アメリカの社会構造の相違を支配・非支配民族の関係から350字で書かせる問題

（用語を並べても逃げられるが、論述対策をしていれば、比較的楽に回答できる）

2017年入試

『大航海時代以降のアメリカ大陸の植民地化とその独立と問題点』

設問1 … 空所四択 設問2 … アメリカ史の短文論述

設問3 … ラテンアメリカの社会構造を13植民地と比較する（350字）

2018年入試

『ヨーロッパ統合とイギリスのEU離脱問題』

設問1 … 冷戦初期の米ソ対立の構図（正誤四択問題） 5問 50点

設問2 … ヨーロッパ統合の拡大と抑制（250～300字） 50点

設問3 … イギリスのEU離脱の背景・立場（250～300字） 50点